

文窓

ふみのまど

キャパシティー



文窓会会長 広瀬 豊英

神大には今年4月から新たに海事科学部が加わって10の同窓会がある。そのうち法人が4つある。あるいは法的には「権利能力なき社団」とでもいわれるのだろうが、少なくとも形式的には対等な関係にある。それぞれが独自の歴史的背景とキャパシティーを持って活動を展開している。それらの同窓会の連合体が学友会であり4半世紀の歴史をもつ。その学友会の会則改正について昨年末からたびたび会議はもたれているが論議が深まってないのが実情である。本質的に同窓会と言うものの存在理由の考え方の違いに起因する問題もある。それらを何とか止揚して新しい時代にふさわしい会則を作ることが急務であるが、それにはいまは自分のキャパシティーを謙虚に反省することが最も大事であり、迂遠なうでかえって近道であると思われる。

Capacityを英和辞典でひいてみると、収容能力、包容力、度量、才能、生産力、立場、…とつづく。それをわたし流にあえて一言の日本語（漢語）でいえば「器」とでも言っておこう。文窓会の現在のキャパシティーを省みると、会員各位に実際に立派な人が多いのだが、団体としてはあらゆる面で寥々たる有様といわざるをえない。おのれ（文窓会）の分際・実力（キャパシティー）をすなおに冷静に認めれば、おのずとそこに何をすべきか（当為）、何をしてはいけないのか（否定・禁止）、何をしなければならないのか（必要・義務）…等が優先順位をもって明らかになるだろう。そうすれば学友会の会則改正（文窓会の会則は昨年改正した・別掲）に臨むスタンスもその延長線上にあるといえる。

わたし自身は会長の器でもないし、人間として十分なキャパシティーを持ち合わせていないのは承知しているが、文窓会のキャパシティー・器を少しでも大きくすることに微力を尽くしたいと思っていますので、諸兄姉のご健勝を祈念するとともに、今ひとたびのご指導とご協力をせつにお願いするしだいである。

発行
平成16年10月20日
第2号
神戸大学文学部同窓会
会長：廣瀬 豊英
事務局
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1
TEL (078) 881-1212(代)
FAX (078) 803-5529

「ふみ」の世界の再構築を

-法人化から半年、学部長に就任して-

文学部長・文化学研究科長

文窓会名誉会長 松嶋 隆二



文学部同窓会の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。国立大学法人という法人格を与えられて半年が過ぎました。今回の制度改革は、敗戦後の新制大学発足に勝るとも劣らない大転換を我々に迫っています。

最初に訪れた変化は、教育・研究経費の大幅減ですが、戦前、戦後の混乱期にも人文学の研究教育に情熱を持って取り組んできた先輩たちの労苦に思いをはせ、神戸大学文学部ならではという成果を出せるようにしていかなければと考えておりますので、同窓の皆様のご支援をお願いいたします。

ところで、大学自身が転換期にあることもありますが、最近、様々な場面やニュースで「本当にそうであろうか？言葉と現実が乖離しているのでは？」とよく思います。言葉が本来の力を失いつつあるのかと、心配になってくるほどあります。言葉が実質的に意味を持たなくなってしまった人間世界を想像すると恐ろしくなります。ヴァーチャル・リアリティーが人工的視聴覚環境生成に限られていたのが、ついには言葉の世界にまで侵食してきたのかという感概を禁じません。もともと、ヴァーチャル・リアリティーとは、「実在はしないが実質的には意味のある仮想的」現実を指していたはずであります…。リアルではなくアクチャルな世界に根ざした『ふみ』の世界の再構築が必要な時期に差しかかっているのでしょうか？もし、そうであるなら、我々文学部の責任は重大といわざるを得ません。IT技術は、コンテナとして、新しい媒体として利用すれば、時間と空間を越えた『文窓』コミュニティが作れるのではないかと考えます。コンテナに入れるコンテンツに事欠くことは無いはずですので…。文学部同窓会、並びに、会報誌『文窓』が同窓会誌という枠を超えて、アクチャルな世界に根ざした『ふみ』の再構築に積極的に参加くださる事を願っております。

神戸大学文学部同窓会（文窓会）会則

第一章 総則

- 第一条** 本会は神戸大学文学部同窓会「文窓会」と称する。
- 第二条** 本会は事務局を神戸大学文学部（神戸市灘区六甲台町1-1）に置く。
- 第三条** 本会は評議員会の議決によって適当な地に支部を置くことができる。

第二章 目的

- 第四条** 本会は会員相互の研鑽と親睦をはかることを目的とする。
- 2 本会はみずからあるいは神戸大学文学部等と連帯と互恵の精神でもって教育・文化の振興に寄与する事業を行うことを目的とする。
- 3 本会は神戸大学および神戸大学文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三章 会員

- 第五条** 本会は次の会員をもって構成する。
- 2 正会員 神戸大学文学部卒業者、旧文学専攻科修了者および大学院修了者ならびにこれらに在学した者。
- 3 特別会員 神戸大学文学部の現・旧教職員。
- 4 準会員 在学生ならびに本会の趣旨に賛同し、承認された者。

第四章 会議

- 第六条** 本会の会議は総会、評議員会、幹事会ならびに役員会とする。それらの下に委員会を必要に応じて置く。
- 2 総会、評議員会は会長が招集し、議長は会長が当たることを原則とする。
- 3 定期総会は2年に一度開催することを原則とし、事業報告・会計報告をし、かつ必要な重要案件を議決する。
- 4 臨時総会および評議員会は会長が必要と認めたときこれを聞く。
- 5 総会および評議員会は出席者の過半数でもって議決する。可否同数のばあい議長の決するところによる。ただし特別会員、準会員は議決権を有しない。
- 6 評議員会は役員と幹事会でもって構成し、総会に代わって議決する。その場合幹事は評議員になり議決権を有する。

第五章 相談役 役員

- 第七条** 本会に相談役を若干名おくことができる。
- 第八条** 本会に次の役員をおく。

- 2 名誉会長 1名
- 3 会長 1名

- 4 副会長 若干名
- 5 幹事長 1名および幹事
- 6 会計 1名
- 7 会計監査 2名

- 第九条** 名誉会長は神戸大学文学部長をこれに推す。

- 第十条** 会長は本会の事務を総理し本会を代表する。
- 2 会長および副会長は総会において選出する。
- 3 会長および副会長の任期は2年とし重任を妨げない。

- 第十二条** 役員は本会の役員としてふさわしくない行為のあったばあい総会か評議員会の議決によりこれを解任できる。

第六章 同窓会報

- 第十三条** 本会は会報を定期的に発行し会員に頒布する。

第七章 会計

- 第十四条** 会員は終身会費3万円を納付するものとする。
- 2 寄付を受けたり、収益があれば会計に繰り入れる。
- 3 経費については会計担当役員が厳正な内規を定め、それによって執行する。
- 4 会計（年度）は7月1日より翌年6月30日までとする。
- 5 本会の収支決算は、総会に報告し承認を受けるものとする。

第八章 附則

- 第十五条** 本会の会員はその住所、氏名、職場または勤務場所に変更があったときは必ず本会事務局に通知するものとする。

- 第十六条** この会則の改正は総会の承認をえなければならない。

- 第十七条** この会則は平成15年11月30日より発効する。

(以上)

(2003年11月29日総会承認)

神戸大学文窓会（文学部同窓会）—会計報告—

平成15年度収支計算書（平成15年7月1日～16年6月30日）

16年度予算書

収入総額	12,649,364	(当期収入 6,580,340)	収入	11,078,840
支出総額	7,070,524	(当期支出 7,070,524)	支出	11,078,840
差引	5,578,840	(当期差引 △490,184)		0

収入の部	15年度予算額	15年度決算額	差異	16年度予算
会費納入金	2,700,000	5,070,000	2,370,000	4,500,000
協力金	1,000,000	1,385,340	385,340	500,000
利息金	0	10,000	10,000	500,000
総会々費	100,000	115,000	15,000	0
雑収入	0	0	0	0
前年度繰越金	6,069,024	6,069,024	0	5,578,840
収入合計金	9,869,024	12,649,364	2,780,340	11,078,840

支出の部	15年度予算額	15年度決算額	差異	16年度予算
会議費	150,000	141,778	△ 8,222	150,000
事務印刷費	100,000	51,549	△ 48,451	100,000
通信交通費	150,000	194,740	44,740	150,000
交際接待費	200,000	263,850	63,850	250,000
協力金費	1,300,000	1,228,900	△ 71,100	1,300,000
(学友会費)	200,000	154,200	△ 45,800	200,000
(活動援助費)	100,000	74,700	△ 25,300	100,000
(学術助成費)	1,000,000	1,000,000	0	1,000,000
会報費	1,500,000	1,311,377	△ 188,623	1,500,000
歓送迎会費	600,000	567,820	△ 32,180	650,000
(卒業生対象)	450,000	450,220	220	500,000
(新入生対象)	150,000	117,600	△ 32,400	150,000
総会費	200,000	180,000	△ 20,000	0
事業活動費	0	0	0	1,300,000
慶弔費	50,000	90,500	40,500	100,000
雑費	50,000	30,010	△ 19,990	50,000
積立金	0	3,010,000	3,010,000	3,000,000
予備費	5,569,024	0	△ 5,569,024	2,528,840
支出合計	9,869,024	7,070,524	△ 2,798,500	11,078,840

平成15年度財産目録

(平成16年6月30日現在)

事業年度に係わる決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成16年8月3日

会計監査 中川一三印

会計監査 永田 良印

科 目	金額	
I 資産の部		
(1) 通常会計流動資産		
現金	97,985	
普通貯金	2,516,805	
郵便振替	2,964,050	5,578,840
(2) 特別積立金		
定期預金	10,010,000	(みなど銀行)
定額郵便貯金	4,000,000	
" "	3,204,000	
" "	3,000,000	20,214,000
II 負債の部		
(1) 流動・固定負債	0	0
III 正味財産合計		25,792,840

～本部だより～

一年間のおもな行事・会議と議題(要旨)

文窓会

- 15. 11. 29 臨時総会(会則改正承認)
- 16. 1. 22 役員会(学友会会費上納拒否を決定、ことしの目標設定 ①「文窓会・学友会」の改革・財政基盤の強化
②広報(体制)の充実)
- 3. 14 学部新入生に対する手続
- 3. 26 同上
- 3. 22 学部(主催)懇親会に役員出席
- 3. 24 (午前) 卒業式
(午後) 卒業記念パーティー
- 6. 2 役員会(主催)学部教職員幹部との懇親会
- 6. 29 役員会「学友会に対する基本方針」提示・再確認
(会則、名簿D.Bなど)
- 9. 6 役員(会)と新旧学部長との懇談会

学友会

- 15. 12. 3 幹事会(会費上納問題が中心議題)
- 16. 1. 15 会長・理事長会
(会費上納問題結論えず、名簿D.B議題になる)
- 1. 28 幹事会(会費上納拒否される。業務委託、名簿D.B提案されるが結論を得ない)
- 2. 25 会長・理事長会(会則案否決、名簿D.B案結論えず)
- 3. 18 幹事会(会則案、D.B案、結論えず。名簿D.B委員会設置提案される。文窓会、会則案提出)
- (4月～7月) 名簿D.B委員会(5回開催、結論を出さずに終わる)
- 7. 1 会長・理事長(会)、大学幹部と会議・懇親会(大学の現状をきく)
- 9. 1 会長・理事長会(会則案未決議を確認、今後積極的に討議・決議に取組むことを再確認、学友会ホームページ上の会則は暫定案であることを確認)

(文責・広瀬)

本部役員

- | | |
|-----------|--------|
| 名誉会長 | 松嶋 隆二 |
| (文学部長) | |
| 会長(9回生) | 広瀬 豊英 |
| 副会長(9回生) | 安部 栄治 |
| 副会長(9回生) | 日高 健一 |
| 副会長(16回生) | 池上 淑子 |
| 副会長(20回生) | 中西 みな子 |
| 事務局長・会計 | 花木 直彦 |
| (9回生) | |
| 幹事長(9回生) | 鞍井 修一 |
| 会計監査(4回生) | 中川 一三 |
| 会計監査(5回生) | 永田 良 |
| (相談役・5回生) | 沖野 政宏 |

「文窓」の編集にご協力下さい

1年に1度発行の同窓会報ですがみなさまの情報交換やいこいの広場にもしたいと思います。多くの会員の投稿および情報を役員にお寄せ下さい。(支部役員はP.14をご参照下さい) 編集会議(今後編成予定)に諸りたいと存じます。

広瀬Eメール toyo-hirose@kcc.zaq.ne.jp
池上Eメール pv6a-ikgm@asahi-net.or.jp

鞍井Eメール kurai@oca.ac.jp

その他郵便、電話、Faxでもどうぞよろしく。



(文窓会主催卒業記念パーティー、於大学構内ランス・ボックス)

—～～ 2004年 夏 ～～—

旧旅順日露監獄に安重根の独房を訪ねる

西洋史・五回生 德富 幹生

南京虐殺記念館で
八月十五日の追悼式参列を終え
今年は
日清戦争（中国では甲午戦争）時 下
日本軍人たちが民間人にふるった蛮行
「旅順大虐殺」の跡をたどるために
わたしたちは
大連空港に降り立った
ここまで飛んできて
「旧日露旅順監獄」を
避けて通ることなど
考えようもなかった

ロシアが建て
日本が建て増した
牢獄東牢の赤煉瓦の壁が
強烈な太陽光線に晒されて
燃えていた

中国語とハングルと日本語と
ロシア語が入り混じって
むんむんと汗くさい
多くの見学者の群れを
強引にかき分け押しのけ
前方にしゃしゃり出て
柵で守られた独房窓に
顔をくっつけ過ぎたのだろう
眼鏡と鉄製の柵が擦れ合い
金属性の小さな悲鳴をあげた

二つの引き出し付き木製机と椅子
机上には書家が用いる下敷の布が
かつては明るい緑色だったはずだが
今では黒っぽい暗緑色を見せて
机にぴったり貼りついている

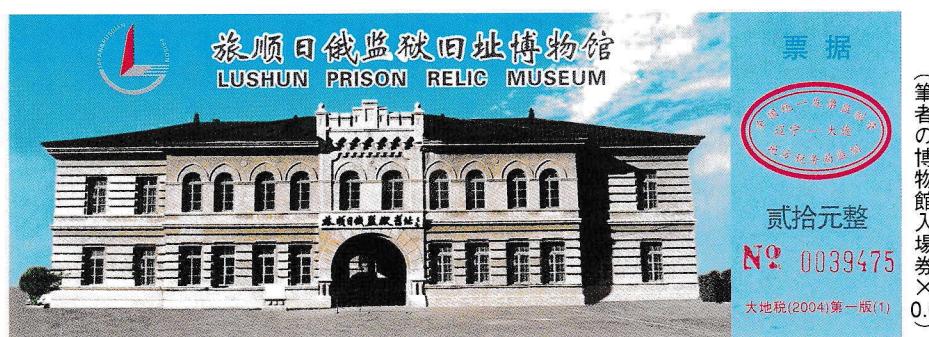
机の左端に
机からはみ出るのも構わず
条幅用の黄ばんだ用紙が重ねられ
机の中央には
壁にくっつくように
筒形の陶器の筆差し
中に五、六本の筆が数えられ

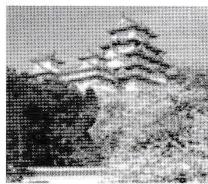
そのすべての筆先が黒かった
中央より少し右端寄りに
茶碗のような、多分磁器の水差し
景色（模様）の呉須の藍色が
あまりに鮮やかで
口辺と糸尻部分に塗られた白色が
いまなお、青味ただよわせて
どこまでも白いのだ
景德鎮かと思ったが
なにせ
民族愛篤い安重根のこと
高麗青磁以外には考えられない、なんて
勝手に決めこんだ
硯は椅子の背もたれに隠れて
はっきり見えない
机を対角で区切って
机上に三角形をつくるかのように
陽が射しこみ
窓の煌きと
窓の周囲の壁の煌きが一つになって
他の部分の暗さとを画然とさせ
暗さの中に便器がくろぐろと一つ

煌きの中に突如
二つの人影が黒い線で現われて
わたしが息を飲んだ瞬間
銃声一発
パーンン・・・・
一つの影がスローモーションで
くずおれて
わたしの視界から
かき消えた
周囲に静寂だけが流れて
もう一つの影の声が
わたしの耳朶をたたく

—— わたしは朝鮮人である
日本人が
日本の法で
わたしを裁くことなど
決して許さない

(前文窓会副会長、著書「猫背のつぶやき」
「一九九五年」・「トルコ日記」)





甘くて苦い尽きない思い出と多くの遺産

—僕らの学生時代・60年まで—

西洋史・八回生 後藤 澄夫

56年、地方出身者は姫路分校に入った。浜田・井沢先生のフランス語は、半年後には原文でカルメンを読むスピードで、予習は忙しかったが、初めて聞くフランス語の発音と教室に流れる「詩人の魂」のシャンソンが田舎者には新鮮であった。「今昔」の大家となった端正な美青年I君も同じクラスにいた。襟を正させるような雰囲気のあった置塙先生の経済学。講義後のO君の見事な解説に、不勉強を恥じるばかりであった。後に転部した彼とは同じ研究室で学んだ。授業にも熱心になり得ず、安堵感と不安感の入り交じった落ち着かない気分に駆られながら、図書館から借り出した本を部屋で寝そべって読む時間が多かった。はみ出しそうに名前が書き込まれたカフカの貸出カードを見たのは初めてであった。

前庭の桜、放歌高吟—旧制高校は斯の如きであったか。播州平野の麦秋、冬の月夜の白鷺城と木々。57年秋、姫路での教養課程を終え、御影の学部に移った。だだっ広いグランドの中に東西に長く、北に継ぎ足しのある無愛想な建物。玄関の入り口左右には、文学部と理学部の名の書かれた電灯がついていた。雑草の茂みが、点在する周りの焼け跡の空き地で揺れていた。

警職法、勤務評定、安保改訂、その間の学舎統合、学長選への学生投票権など問題は尽きなかった。57年も終わりに近い頃、バス一台を借り、40名近い学友と六甲台まで学長交渉を行ったことがある。問題の一つには、六甲台の図書館の利用が法・経・営三学部の学生にのみ限られていたことがあった。文学部のある一帯は当時六甲ハイツとしてアメリカ軍に接収されていたが、返還後その地に学舎建設と大学院の設置が文学部に約束されていると聞いていた。六甲ハイツ返還—学舎統合—文学部の六甲台移転・大学院設置は、先生方のみならず不勉強な我らの悲願でもあった。学長吉林先生は、気さくな方でもあったが、申し入れに耳を傾けてくれるとともに、先生独特の誇張も交えて、「六甲ハイツが返還された暁には、全学部が六甲台に集結し、ハイデルベルグにも比すべき一大学園が出来上がるであろう」という主旨の話をされた。その後まもなく、文学部学生の六甲台図書館の利用は許可された

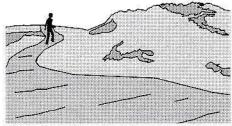
と記憶するが、半年遅れで卒業した在学中にハイツ返還はならず、文学部の六甲台移転・大学院設置の夢はかなえられなかった。

先生方さえ机の配置を苦心して、狭い教官研究室に2~3人雜居されていた。学科ごとの学生研究室など無想だにしなかった。しかし、全学科共同の学生研究室兼溜まり場があり、学年、学科の垣根を越えて知り合いになる機会を与えてくれた。「学生を懐に飛び込ませなければ、真の教育はできぬ!」とよく口にされた井上幸治先生は、演習だけでなく、学界のことから政治・経済問題、はては社会一般に関する雑談にまで教官研究室を西洋史学生に開放してくださいました。同室の先生方にはさぞ迷惑なことであつただろうが、後々の核になるような何かを得た場所であり時間であった。間近でお目にかかった先生のお姿。学問に対する厳しい態度と情熱、広く深い学識、10か国にも及ぶかと思われる語学力、読書と執筆の速さ。驚きと賛嘆は無力感となって我が身に跳ね返りました。助手の武本氏が学問から世俗のことまで、兄者のごとく後輩学生の指導・相談に乗ってくれたのは大助かりであった。

ごく最近思ひの機会に、Aさんが、ある事情で西洋史専攻を諦めたことを伺った。男どもの間で才媛の評判の高かったAさんが仲間になっていたならば、井上先生の教え甲斐も違ったであろうし、岩波新書の『ナポレオン』の原稿を預かって、今も居心地の悪い思いにさいなまれている怠け者も、少しは学間に熱を入れたかもしれない愚にもつかぬことを思いもする。今更、何を、時効である。しかし、労作をも残している教師仲間のK君、先生との釣魚行にお供し、溪流を歩いたT君、姫路、御影以来の諸君との場所と時に妨げられることなき交友も、見知らぬ国をさまよい歩く時に助けになるあれこれも、学生時代の遺産であることだけは間違いない。半世紀近くを経た今も、学生時代の悔恨と思い出は尽きないのである。

最後に研究室と専攻をともにした、畏友文窓会会長の廣瀬君の尽力に敬意と期待を表したい。

(静岡県磐田市在住、著書：新聞・雑誌掲載論文・論説集「高校教師の三十六年」)



司馬遼太郎を散歩する

英米文学・九回生 木下 健一

明日は、姫路文学館別館「司馬遼太郎記念室」で恒例の読書会があり、『王城の護衛者』（講談社文庫）がとりあげられるという日であった。この一年『街道をゆく』シリーズが続けられてきたが、間にはさんで同著がとりあげられたのであった。この作品については何ヶ月も前に読んでいるとはいえ、もう一度印象なり感想なりをまとめるため、ぎーっと目を通さねばならない。ところがそれができない。なにしろ今読んでいる『項羽と劉邦』の最終章に近づいているのである。歴史的な事実としては、劉邦が項羽を倒し漢帝国の基礎をうつたて、戦国時代に終止符をうつとともに、中国全土に君臨するのはまぎれもない事実であるのに、長年の両者の争いは決着をみない。それどころか劉邦は絶望のがけっぷちに立ち、戦場から逃げ出すことのみ考えている。絶体絶命のこの苦境を、劉邦はどう打開し、勝利を手中にするのかー。それを見届けない限り、私は『王城の護衛者』はおろか、他のことに一切手をつける気にはなれなかつたのである。もっともオリンピックのハイライト・シーンだけはみることを許したが……。『項羽と劉邦』に魅せられたことにかこつけて、おためごかしの自分自身への言い訳である。

読書会当日の朝、少しの時間をさいてページを繰った。そしてあたりさわりのない言説を弄して所感を述べたのである。集まった二十余名の人は、それぞれ自分の所感をメモにし、縷縷読書感を開陳したというのにー。ほとんどの人が、京都守護職松平容保の生き方に否定的なみかたをしていた。肯定的なみかたをする人がいたかどうかは、定かでなくおそらく皆無ではなかったか。最後の將軍徳川慶喜についても同様である。私は意外な感じがした。それはそれで結構なことである。人には人で様々なみかたがあり、自分はそれをきいて納得すれば参考にすればよい。それが読書会の効用というものであろう。私自身は会津藩主松平容保の生きざまには、心情的に理解でき得るものがある、としたのである。さらに白虎隊の悲劇についてもアプローチしてみたい、と言わなくてもいいことを言ったりした。

時空を超えた俯瞰的視点

まぎれもなくそれは自分の感じ方なのだが、やはり私の胸中を支配していたのは、つい昨夜読了したばかりの『項羽と劉邦』のことであった。私は、膨大な司馬文学、特に歴史小説と称されるものに、一つの重大なポイントがあるのではないか、

と読書会に出ながらも思い続けていた。

それは、時代を越え、はるかな天空のかなたから、街に野に群れる多くの人達を把えるという客観的な司馬遼太郎の視点のことである。

そうだ、視点だー。司馬遼太郎は、常に自らを天空高く身をおいて、俯瞰的に人物を、歴史を眺めようとしている。これがポイントだな、と思い続けていたー。こうした視点にたって司馬さんは立体的な叙述をすすめる。人物を点綴する。その際ちりばめられる無数のエピソード。『項羽と劉邦』についていえば、『史記』であり『漢書』ほか多くの和漢の古典に依拠しているのだが、そのエピソードに司馬さん自身のイマジネーションをふきこみ人物像を構成する。劉邦は右に行き左に走る。まさに、天空をつきぬけた高所からみて、自在に人物を動かしている。これだな、これが司馬さんの視点だな、と私は思い続けていた。

小品とはいえ、『王城の護衛者』の冒頭と終末の文言もそうした視点で叙述されたものではないかー。

“会津松平家というのは、ほんのかりそめの恋から出発している”

“竹筒一個 書簡二通 という品目で、いまも松平容保の怨念は東京銀行の金庫に眠っている”

このことを読書会でも述べたのだが、あまりにもとつてつけたような感想であったようだ。

『空海の風景』もそうであるー。初め私は『空海の風景』の「風景」とは、いったいどういう意味なのかつかみかねていた。考えてみると1,200年前に実在した空海という希有な人物。それを描写するには、まさに空海が居たであろう風景を描写し、そこに一風景としての空海を点綴することによって現在によみがえらせる以外にないのではないか……。地理、空間、時間、自然と同じ感覚で空海は描写され、現代の私によみがえったのだ、と考えた。1,200年前の長安、最澄との確執。一つ一つの事象を風景の中に点綴することによって、現代によみがえらせようとするー視点。はるかな時空を超えて俯瞰的のものをみるという手法ー。『項羽と劉邦』を読んで、まるでビルの屋上から、街を往来する人達を見るように描写する司馬さんを思ったのだが、同時に、ハタと『空海の風景』もまた、完璧にその視点が確立していることに思い至ったのであった。

私の司馬遼太郎へのアプローチの仕方はまことに稚拙なものであり、大方の憐笑をかう態のものではあるが、以上のような考えにいきついたとき、私は大いなる満足を覚えていた。（8月21日記）
(兵庫県太子町在住、太子町文化協会事務局長)

地域社会の中で神大文学部のめざすもの



—阪神・淡路大震災後の地域遺産保全活動をとおして—

日本史・三十一回生 文学部助教授 奥村 弘

大規模な自然災害は、直接人命を奪うだけでなく、地域の文化遺産を破壊、消滅させることによって、地域で生きてきた過去の人々の記憶を奪った。災害から地域が復興していくために必要な地域住民のつながりを、過去の記憶ごと断ち切っていくものであった。

阪神・淡路大震災の中でそれを痛切に感じた私たちは、文学部を活動の拠点として、歴史史料ネットワーク（史料ネット）というボランティア団体を形成した。様々な大学から歴史関係の研究者や院生、



95.4.10 西宮市での遺産保全の様子

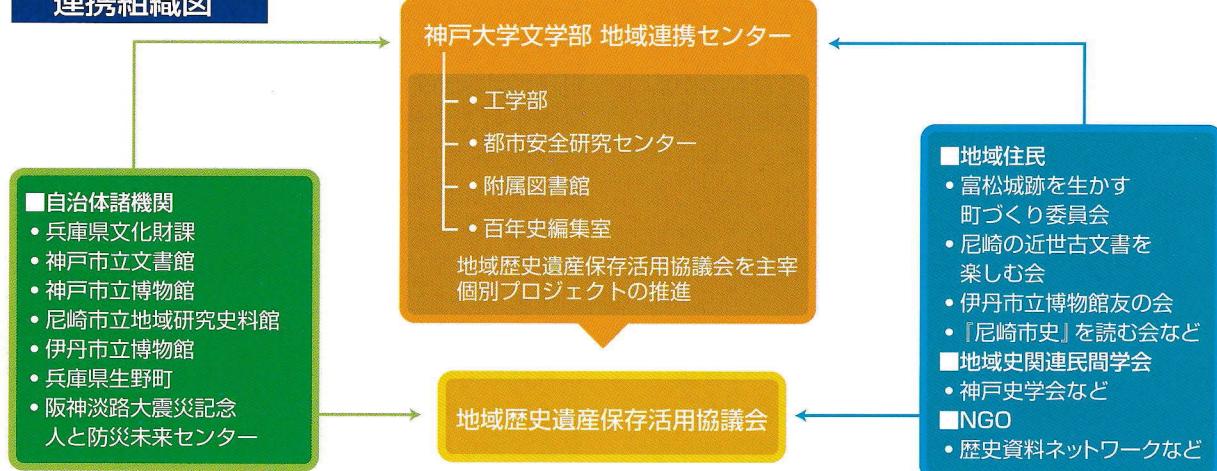
文書館等の専門職員、地域の歴史研究者が集まり、地域歴史遺産の保全（文献史料を中心に段ボール箱1,500箱に及んだ）、それを活用した市民講座、歴史を生かした街の復興の支援、市民の歴史研究の援助などの活動を現在も続けている。

誇りに思う多くの 同窓生の支援活動

史料ネットの活動を通して私が誇りに思ったことは、歴史遺産保全活動の中で同窓生の方々が、地域文化を支えておられる姿を様々な場面で拝見させていただいたことである。研究職、専門職、教職につかれた方だけでなく、他に職を持ちながら活躍されている方も多いことを改めて知ることになった。文学部が創設されて50年、地味で普段は目立つことはないけれども、この学部が地域で持つ意味の大きさを再認識させられた次第である。

史料ネットは大震災の経験を生かし、昨年の宮城県北部連続地震、今年の福井県の大水害など、大規

連携組織図



模災害時に現地で地域遺産保全組織を立ち上げる活動を支援してきた。私たちはまず、地域社会の記憶を大切にしたいという住民の強い思いがあることを、被災地の自治体や歴史関係者に伝える。死者が出たり、生活が困難な下で、被災者に地域遺産保全を呼びかけるべきか、関係者が最初に躊躇する問題である。ここを突破してはじめて、現地での具体的な活動は進展していくからである。

次に課題となるのは、なにが保全すべき地域文化遺産なのかということである。古文書や古い建築物だけが地域遺産ではない。たとえば、第二次大戦前後は、紙質が悪い上に戦後に破棄された資料が多く、明治期より分からぬことさえある。未来にむけて地域の記憶を伝えていくものは、どこにでもあるようなものも地域遺産となる。しかしながら地域遺産でどのようにそれを保存活用していくのかを住民とともに考え、支援していく自治体文書館や博物館、大学の地域史研究教育機能は物的、人的に脆弱である。

学部内に立ち上げた 地域連携センター

このような状況に対して、神戸大学文学部は、一昨年度から「文学部地域連携センター」を立ち上げ、県下自治体や市民を支援し、地域歴史遺産の保全や活用をサポートする活動をはじめた。別掲の連携組織図を参照してください。たとえば尼崎市富松地区の人たちとHP上のバーチャル博物館の開館、神戸市淡河町での地域歴史遺産の保存活用、揖保郡新宮町や香寺町での町史編纂のサポートなど、



96.5.19 歴史資料ネットワーク市民講座での被災資料の展示

センターの活動は拡大しつつある。同様な活動を積極的に展開する国立大学はほとんどなく、全国的にもユニークな活動として紹介されるようになった。

被災地にある大学でなにができるのか。史料ネットや、センターの活動の中で、考え続けて10年が経った。明確な答えを得られたわけではない。しかし文学部の学問とは本来そのようなものであろう。今後も地域の歴史遺産の保全と活用をすすめる活動をすすめていきたいと考えている。同窓会の皆様に、いっそうのご支援をお願いする次第である。

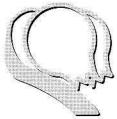
(著書:『歴史の中の平家と神戸』歴史資料ネットワーク編)

関連かわらばん

地域遺産 保全活動 文科省支援プログラムに選定される

大学の優れた教育改革の取り組みを公募し、予算を重点配分する文部科学省の初年度「現代的教育ニアーズ取り組みプログラム」で「地域活性化への貢献」をテーマにした神大はその対象に当選したことが9月24日公表された。全体で559件の申請数から86件(15.4%)が選定された、そのうちの一つである。神大は阪神・淡路大震災での地域の被災した貴重な歴史遺産を市民とともに保全し、生かすプロジェクトであり、自治体や市民団体と協力し活動のリーダー養成にも取り組んでいる。鈴木正幸・副学長(元文学部長)のことば「活動はまちおこしにつながる。今後も市民とノウハウの蓄積を進めたい」

(9月25日神戸新聞、26日朝日新聞より編集子抄録)



新モモタロウ伝説

芸術学・十回生 山本 幹二

『モモタロウサン、モモタロウサン
オコシニ ツケタ キビダンゴ
ヒツツ ワタシニ クダサイン
アゲマショウ、アゲマショウ
コレカラ イラクヘ セイバツニ
ツイテ クルナラ アゲマショウ』

モモタロウは大変欲張りで力持ち
忠犬ボチは
モモタロウのご機嫌を取るために
仲間を戦場へ送ります

モモタロウは
戦争が大好きです
戦利品を取り込むことに快感を覚えます
でも自分から戦争を仕掛けることはしません

ボチの村がモモタロウの村の池へ
石を投げたときも
待っていましたとばかり
毒キノコを二本も
ボチの村へ投げ込んできました
ボチの村はあえなく降参
モモタロウはオヒトヨシで従順な村を
ほとんど労せず手に入れました

狂犬チロがモモタロウの村に
自分の羽の下に火を抱いて飛び込んできました
自慢の大木二本が燃え尽きて
大勢の犠牲者がいました
そのお返しにモモタロウは
チロの家を踏み潰しました
チロのボスが見つからないので

怒り狂って
隣村にまで乗り込みました
その村に「毒キノコ」があるかもしれない
との理由をつけて



しかし「キノコ」はもちろん
「タケノコ」もありませんでした
モモタロウにとって
それはどうでもよかったのです
本当はその村にある
燃える水が欲しかったのです

チロの隣村は
ボチの村とは違っていました
今も戦争が続き
血が流れています
その近くでオリンピックが開かれました
憎しみも殺し合いもない
フェアな競技に
汗が流れました

その年はボチの村は金メダルを
十六個もとりました

その年の夏は大変暑かったので
桃は甘く実りましたが
渋い顔のモモタロウは選挙が心配です

(2004年9月1日記)

(福岡県詩人会会員、詩誌「PARNASSIUS」同人
著書：詩集「兎小屋」)



夏の涼しさと冬の寒さについて

哲学科・四十三回生 天野 謙治

私は北海道出身で、あと何年かでこちらの在住期間の方が長くなるくらいですが、戦後二番目の猛暑となったこの夏もまた、学校などの往来では厳しい暑さでした。やはり何年経験してもこの暑さに慣れるということはありません。ただ、今住んでいるところは、大学の真北にあたり六甲山を北に越えたところで地図で確認したところおよそ標高250mに位置しています。神大に入学して以来何箇所か住んだ場所では考えられないことに、夏の盛りでもクーラーはおろか扇風機ですらほとんど使いません。窓を開けていれば充分に涼しく、先日などは盆を過ぎたばかりだというのに、夜に寒くなり窓を開けていられない状況でした。明らかに7月に帰省した実家の方が室内温度は高く、未使用のクーラーを持ってきて取り付けたいほどでした。

他方、冬の比較をすると、室内温度は確実にこちらに来てから下がりました。理由は、断熱材の量や

窓の造りなど家の構造にも求められますが、何といっても暖房費に糸目を付けるのか付けないのかという腹の据わり方の違いにあるような気がします。(もっともこの違いは結局、天候、外気温の違いに行き着くでしょうが)とにかく北海道では、せめて家の中は暖かくしないとやっていられない、という気持ちが室内温度をどんどん上げていきます。半端な暖房器具は要りません。だから「こたつ」は大学に入って初めて使いました。(某人気番組でこたつの北限線はどこか、という調査をやっていました。東北の南部がボーダーラインだそうです)初めはこんなにいいものがあったのか、と喜んで使っていましたが、こたつだけでしのげるはずもなく、かといって家中を温めるのももったいない。結局、居間だけが暖かく他の部屋や廊下は寒い今まで北海道にいたころよりもつらい冬の生活となってしまうのです。

(現在博士課程：西宮市在住)



いくさとは空しきものと悟りけり —宝川温泉雜記—

社会学科・十九回生 渡辺 耕士

「青春18きっぷ」を利用して水上（群馬県）の奥にある「宝川温泉」に行ってきました。このきっぷをご存知の方も多いと思いますが、「日帰り安上がり旅行派」には最高のすぐれもので、普通列車だったら一日乗り放題。新幹線と違い予約なしで大体座って旅行が楽しめます。

新聞記事でこの温泉を知り、家内と出かけた次第です。山間の一軒宿で、せせらぎの音もなつかしい「正当派温泉」でした。露天風呂が川をはさんで3箇所あり、どのお風呂も肌に柔らかくゆっくり楽しむことが出来ました。

そのひとつのお風呂の名前が「子宝の湯」結構若いカップルが多く「日本人口少子化」問題の解決に役立つことを願いました。家内も温泉着を着て一緒にいきましたが… 多分もう日本の人口増加には役に立てないでしょう。

温泉は良かったのですが、「虻が大発生しております」の注意書き通り見事にやられました。それも助けた虻に…。

ゆったりとお湯につかっていると、目の前の水面で虻が必死にはばたついています。なんとなく「蜘蛛の糸」を思い出して義侠心を出したのが失敗でした。手でくって岩の上に移してやると、10秒くらい羽を擦って乾かしていましたが、やがてびゅんと高く飛んで行ってしまいました。普通ならここで「命のお礼の挨拶」があってしかるべきですが、残念ながらなんのサインもありません。虻の世界には「仁義」という言葉がないのでしょうか。

昼のビールおつまみコースが終わり、二度目のお湯を楽しみに露天風呂に下りていきました。

今度は「不動明王」像近くの浅い風呂につかり、



ついうとうととまぶたを閉じていたところ、「痛ッ」と思った瞬間に外に出していた足首を見事に刺されました。

この野郎とお湯をぶっかけましたが、見事にかわされ逆に顔の方に攻撃を仕掛けてきます。

その瞬間、憎っくき虻が先ほど命を助けた虻だと気がつきました。額にある天下御免の向こう傷、先ほどの虻に間違いない…と思います（自信はありませんが…）

小生怒り心頭です。恩を仇で返すとはなんたること。かの蒋介石総統は敗戦後の中国残留日本国民に対し、「怨に恩で報いよ」と大号令を発し我が先輩方の命を救ったというのに。（実は、小生の母、兄もこの政策のおかげで上海から無事長崎に帰国できました）

もうこうなったら、「男と男の勝負だ！かかるこい」とお湯を手でくつ伺ひましたが、こちらの戦闘意欲に恐れをなしたのか、「ブーン」と一呼吸おいて飛び去ってしまいました。

後に残るは、腫れた足首と周りの人の失笑だけでした。戦いすんで日が暮れて…いくさとは空しさだけが残るものようです。では又…

（横浜市在住）
(作画：菌田章吾氏は渡辺氏の同じ会社の後輩であり、教育学部出身)



新人OL奮闘記

働き始めてから1年たちますが、いまだ新人気分が抜けません。さすがにA係長をA課長と呼んで、こそばうに笑われたり、B課長をB係長と呼んで、ヒンシュクをかったりすることはなくなりましたが、また今年に入ってせっかく覚えた役職名が変り、もとの木阿弥です。

それに、いつまでたっても目もくらむような時間に起き出し、朝の7時には駅に立って電車をまっているという状況にも慣れません。それも私一人だけの話ではなく多くの人が文句を言うわけでもなくまた座り込みをするわけでもなくもくもくと電車に乗り込んでいることが大変不思議です。

また今年の夏は特に暑い日が続きましたが、セミの大合唱の中を汗水たらしながら歩いていると、



哲学科・四十八回生 寺林 香乃

「本当なら今頃は夏休みなのに！」と思っています。「本当なら」って一体何が本当なんだろうと、はたと氣付くと同時にもうあの頃には戻れないのだと、お休みのない悲しさがひしひしと込み上げてきます。

最後に、日常生活に支障をきたすという意味で、深刻なことがあります。新人特有の電話病にいまだに感染しているということです。症状は以下のとおりです。
①電話はなっていないのに音が聞こえて受話器に飛びついている。
②他の部署の電話も、反射的に取ってしまう。
③家の電話でも勤務先名を名乗ってしまう等々。

特効薬をご存知の方、是非ご一報下さい。

（西宮市在住、梅田公共職業安定所勤務）



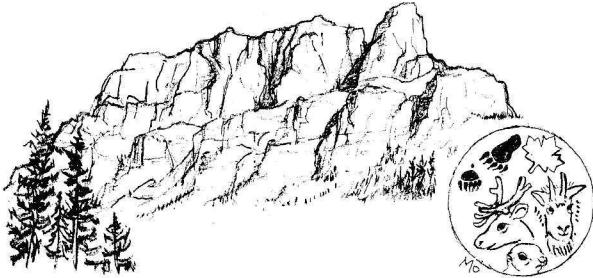
人と自然が豊かなカナダ

哲学科・三十七回生 辻 潔

この夏、海外語学研修を受ける27名の生徒を引率し、オンタリオ州トロント郊外の町、ハンツビルに18日間滞在した。私自身カナダへ行くのは5回を数えるが、今回が初めての東部オンタリオ州への訪問だった。その経験からいうと、カナダの魅力は、ナイアガラの滝やパンフの氷河などの有名な観光スポットに限られるものではない。もちろん、それらカナダを代表する自然は素晴らしい（今回初めてナイアガラの滝を見ることができたが、夏で水の量が多く、やはり感動的だった）けれども、そこに住んでいる「人」といつでも触れられる「自然」が本当のカナダの魅力だと思う。

今回の訪問からまず「人」の例を挙げると、研修プログラム・コーディネータ、トム・クラーク。今年の6月で、高校の教師を退職したばかりの55歳。美術、ドラマ（演劇）、英語を教え31年間ずっとハンツビル高校に勤務し、「今では町の3分の1は自分の教え子だ」と話してくれた。いろいろと話をした中で印象的なのは「カナダは初めてアメリカに反対して、イラクに出兵していないことを誇りに思う」と「カナダ人は引っ込み思案だ。自分の発言の番が来ても、お隣の顔色を見ているんだ」という言葉だった。

カナダの自然の魅力は、森と湖。森では様々な動物に出会える。家の裏の森には、鹿は当たり前で、熊もいる。今回の訪問で感動したのは、「狼の遠吠え」だった。キャンプに行ったときにキャンプのリ

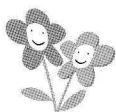


ーダーが宿舎から歩いて15分した道端で、森に向かって狼の鳴き声のまねをした。すると、少し沈黙があった後、本物の狼がそれに返事をして鳴いた。絶滅に瀕している狼の鳴き声が、沈黙した森に響いたとき背筋がゾクッとした。

カナダ人にとって湖は、恐らく私たちにとっての池だと思う。湖の近くに住んでいる人は、ボートを持っていて湖を航行しながら食事と会話を楽しんでいる。また、週末には必ず湖に出かけていって子供たちはカヌーやカヤック、水泳を楽しみ、大人は日光浴とバーベキューをしながら友人たちとの語らいの時間を楽しむ。夏は日没が遅い（午後九時でもまだ明るい）ため、できるだけ太陽を浴びていようという考え方のようだ。これが典型的なカナダ人の生活なのだろう。

カナダの豊かさは、人と身近にある自然、そこでの生活にあるような気が改めて18日間だった。

（奈良市在住、大阪 国際大和田高校）



正しい日本語？

アテネ・オリンピック野球チームの選手たちは慨然とした面持ちで成田空港に姿を現した。そもそも長嶋茂雄が檄を飛ばしたことで結成されたプロ選手のみによるこの代表チームは、長嶋が病気によって戦列を離れたことに伴い、ヘッドコーチであった中畠清を監督代行に据えるという姑息な手段をとり大会に臨んだが、準決勝で敗退した。結果的には日本とキューバを比較して日本の方が与しやすいとみたオーストラリアの戦略が的を射た形となった。日本はキューバに勝つことを悲願としてきたが、金メダルを獲得したキューバは日本のライバルというには役不足であったのかもしれない。ともあれ優勝することを条件に結成されたプロ野球によるチームの敗北が、今後の球界再編および一リーグ制への移行ひいては日本野球界そのものの衰退の流れに掉さすことになるのではないかと危惧される。

先日文化庁によって、「本来とは異なった意味」で広く認識されているいくつかの慣用表現が発表さ

哲学科・四十九回生 藤井 千佳世

れた。それらの慣用句を本来の意味に即して用い、上のような文章を作成してみた。この文章に違和感を抱かれた方は辞書を参照して頂きたい。

勿論、私自身も異なった意味で認識していた一人である以上、「正しい日本語」が損なわれていることを嘆ける立場はない。むしろ開き直っていえば、国民の二割以下にしか通じない言葉を辞書に則っているというだけで「正しい日本語」と呼べるかどうか自体疑問である。言葉も生き物であり、当然、新陳代謝を行う。

ただ、現在では消え去りつつある「本来の意味」に立ち返り、その意味の変遷の過程、いわば言葉の歴史に思いをはせ、複数の意味の狭間を逡巡しているうちに、その表現が用いられた文脈から喚起させられるイマジネーションが膨らんでいくことは実に楽しい。このイマジネーションの広がりが言葉の含意を豊饒にし、こうして一つの言葉或いは表現が私の中で成長していくことに喜びを覚える。

（灘区在住、現在博士過程）

六甲初秋

国文・九回生 小林 虚人



約束の駅蟋蟀の鳴いてをり
昼の虫碁盤は縦にやや長く
一局の山場へ忽と秋の蝶
逆転の一手あるべし法師蟬
中押しに負けてそのまま秋昼寝
きりぎりす播磨灘から雲が来る
(一一〇〇四年八月)



拾った小犬

一年ほど前、大学からの帰宅途中のことです。自宅近くのバス停で降り、夕闇の中をとぼとぼ歩いていると、なにやら小動物の鳴き声がします。自宅の辺りは住宅街とはいえ、ベランダの前の田圃に鶯や雉子の夫婦、果ては狸の親子が訪れるような環境です。恐る恐る声のする方へ近づいてみると、草むらの中で小さな子犬が4匹ほどキューキューと鳴きながらごぞごぞしていました。この辺りは野良犬はまず見かけませんし、親犬も見当たりませんから、恐らく人間の手で捨てられたのでしょう。このままでは、車に轢かれるか、飢え死にしてしまうだろうと考えた私は、家族と共に近所の交番へ連れてゆきました。後日、警察の方から伺った話では、2匹はそのまま力つきてしましましたが、あの2匹は引き取って下さる方があったそうです。

ところで、私は、あの子犬たちが一体どういったいきさつで捨てられたのか、少し気にかかっていました。捨てた人も、思いがけずに生まれた子犬を飼うことができず、誰かが拾って育てくれるかもしれないと思って、捨てたのだろうと思います。けれどもやはり、野生化して生きてゆくのにふさわしい環境がない以上、飼い主を探す努力を放棄すべきではないでしょう。我が家でも、マンション住まいな

哲学科・四十三回生 上南 佐和

がら犬を飼っています。某市の動物愛護センターのようなところから、子犬のときにもらってきました。最初の頃は、やんちゃでいたずらばかりするので閉口しましたが、それでも愛らしく、感情豊かで、時々犬であることを忘れる程です。だからだれもが動物を可愛がるべきだ、とは思いませんが、捨て犬を拾ったのは何となく気持ちの重くなる出来事でした。

さて、それから随分たった頃、我が家を散歩させていたと気づいたことがあります。散歩の途中いつも見かける、工場で飼われているシェパードに似た犬とあの時拾った4匹の子犬がふと結び付いたのです。よく考えてみれば、拾った場所も工場の敷地のすぐそばでしたし、子犬の顔つきも似ています。なぜこれまで気がつかなかったのか、不思議なくらいでした。黒くて大きなその犬、いつも細長く囲われた草地を走り回りながら我々に向かってわんわんと吠えていたこの犬になんとなく親しみを感じていました。それがここ一ヶ月程見かけません。数カ月前から何となく具合が悪そうだったので恐らくは、と思います。もし犬に言葉が通じるのなら、あなたの子供は半分は助かったのよと、伝えてやりたかったと思います。(現在博士課程、西宮市在住)

追悼 — 岡田章氏のご逝去に際して —

昨年十月、元文窓会会长、岡田章氏が亡くなられた。氏は昭和四九年から五六年の間、文学部の研究・教育が充実発展途上の時代に会長として活躍された。故岡田氏は英米文学一回卒の大先輩であったし、なによりも今日の文同窓会の基礎を固めていたいたことに、私たち後輩は感謝の思いを深くするのである。故岡田氏が会長をしておられた頃、荒町の御自宅を開設していただいて会議とか会報づくりをしたり、親しくされていたお寺で役員会をもつたこと等、私たちには忘れられない思い出である。

前文窓会会长・五回生 沖野 政弘

故岡田氏は文学部卒に適わしく、世間一般の大勢に安易に妥協するところが全くなく、御自身の意見をはっきりともっておられた。御家庭での三人の男の子様の子育てについても明確な教育観をもっておられ、教育を職業にしている私たちが多くのこと教えていただいた。私個人としても長い御交誼をいただいた中で、多くのことを学ばせていただいたことに、時の経過と共に感謝の思いを深くするのである。先輩、公私にわたりお導きいただき有難うございました。(合掌)

東京支部だより

1. 文学部東京支部同窓会

第二回同窓会を開催した。

日 時：2003年10月23日（木）15時～17時

場 所：神戸大学東京凌霜クラブ

特別ゲスト：岩崎信彦・文学部長、 広瀬豊英・文学部同窓会会长

出席者：松浦暢（昭和30年卒） 小野幸次（32） 竹歳一夫（32） 広瀬祝子（32）

稻見宗孝（33） 高見秀史（33） 河野房子（35） 白藤禮幸（36）

井上真太郎（36） 橋本静子（36） 金山和子（36） 一矢啓子（36）

中野裕（36） 川島好子（37） 五味尚子（37） 藤山賢子（39）

松坂規子（39） 田辺久美子（42） 川谷愛作（54） 江口佳実（63） 以上計20名

2. (社)凌霜会東京支部・神戸大学東京凌霜クラブ主催の木曜会（文学部担当）が同日18時より開催され、岩崎文学部長に講師をお願いした。「今どきの若い者について考える」と題する非常に興味のある講演であり、各部の出席者より大好評であった。

3. 東京支部の役員：支部会長・小野幸次（昭和32年卒） 幹事・河野房子（35年卒）・中野裕（36年卒）

4. 第3回同窓会開催の予定

2005年7月を予定している。この月が、木曜会の文学部担当月になっており文学部の教授をお呼びして講演をお願いする予定。

5. その他の行事（神戸大学東京凌霜クラブ主催の会合）

1) 各学部の代表による「学友会連絡会」には、小野会長、中野幹事が出席（2ヶ月に一度）

2) 定例会合：

新年互礼会：毎年1月下旬

支部総会：毎年原則として5月

ビヤーパーティ：毎年8月下旬

忘年会：毎年12月下旬

特別火曜会：毎月1回（原則として第3火曜日）

火曜会：毎週火曜日（特別火曜会開催日を除く）

木曜会：毎月1回（原則として第4木曜日）

神戸大学東京凌霜クラブの上記会合には、文学部の有志の方々が参加します。

6. 東京支部の連絡先について

中野 裕 (Yutaka Nakano)

住所：〒223-0064 横浜市港北区

下田町1-1-113

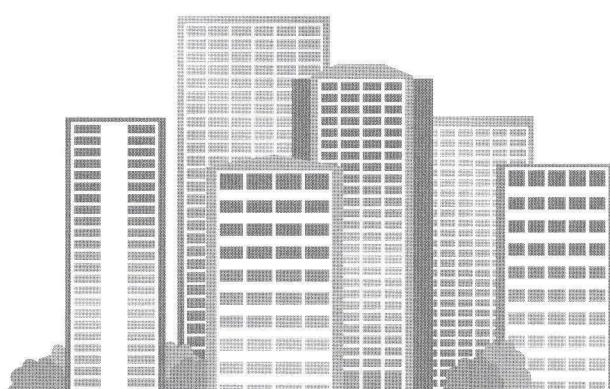
電話・FAX：045-561-6317

E-Mail：y.nakano@d9.dion.ne.jp

7. 上記の各種案内の希望者について

新規に送付ご希望の方は、

上記 中野までご連絡下さい。



文窓会東海支部(仮称)設立の呼びかけ

国文・八回生 萩 紀男

文学部は、創立以来五十余年の星霜を重ねました。その間、東海地方にお住まいの文窓会員も、次第に増えてまいりました。しかし、残念ながら現在、会員を相互に結ぶ組織はありません。そろそろ文窓会東海支部(仮称、以下略)の設立が必要な時期だと思います。そこで有志が意見を出し合い、次のような案をまとめました。皆さんのご賛同を得ながら、よりよいものを作りあげてゆきたいと考えます。ご協力いただきまますよう、心よりお願い申し上げます。

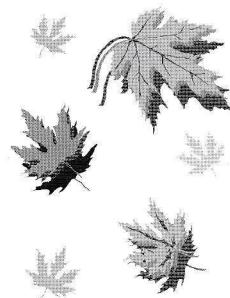
1. 東海四県(愛知、岐阜、三重、静岡)在住者を対象に、文窓会東海支部を設立する。
2. 組織としては、会長(=支部長)の他に、事務的・事項取扱いのため複数の幹事役を置く。
3. 幹事役の任期は一年とし、各県持ちまわりとする。
4. 担当県にて、年一回の総会を開催する。
5. 総会では、懇親会(食事会)のみならず、その県在住者による講演会などを併せ開催し、高いレベルの知的交流を目指す。
6. 第一回総会は、来春を目途に名古屋市で開催する。
7. 詳細については、今秋開催予定の文窓会総会で、ご出席の東海地方在住の方々と相談の上、決定する。

東海地方は、現在わが国で最も活力に富む地域だと思います。来春には、名古屋市郊外で「愛・地球博」が開かれます。それに合わせて、わが国最初の24時間空港である中部新国際空港が開港します。こうした、この地にとって歴史的な年に、私たちの文窓会東海支部が誕生することになれば、それは誠に意義深いことだと思います。

また、この地の会員の皆さんには、各界で目覚ましい活躍を続けておられるか、或いはすでにそれを終えられ、矛を納めて静かな日々をお過ごしになっておられます。こうした方々のお話を伺いすることは、私たちの人生に貴重な示唆を与えていただけるに相違ないと確信致します。文窓会東海支部の発足に期待する所以のものであります。

なお、この趣旨にご賛同いただきましたのは、次の皆さん方です。
(敬称略、卒業年次順)

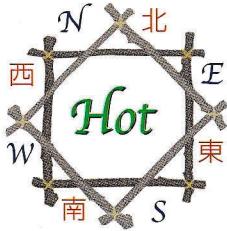
山下宏明(国文5回生)、河原崎弘(英文8回生)、後藤澄夫(西洋史8回生)、土屋 勝
(国文8回生)、江村治樹(東洋史19回生)



神戸大学学友会三重県の会(仮称)開催のお知らせ

1. 日 時: 平成17年1月23日(日) 11時から
2. 場 所: プラザ洞津
津市新町1丁目6番28号(近鉄津新町徒歩1分)
電話: 059-227-3291
3. 会 費: 未定(最大1万円)
4. 参加予定: 現在、文学部のほか、凌霜会(経済・経営・法学部)、工学部、農学部、教育学部卒業生が出席予定です。
理学部については、機関紙「くさだより」にて紹介いただく予定です。
5. 参加申込み: 文窓会員につきましては、別途往復はがきでお問い合わせ致します。
6. その他の: 従来は凌霜会三重県支部総会として開催していたのですが、今年度より全学部の同窓生に呼びかけて開催するものです。
7. 連絡先: 萩 紀男(国文35年卒)
住所: 〒512-1113 三重県四日市市鹿間町95-1
電話: 0593-28-1160
Eメール: michiohg@cty-net.ne.jp

泉 康弘氏(東洋史・10回生)バチカンで植樹



徳島県を中心とした郷土史研究グループ「長慶会」(泉康弘代表)は他のグループとともにカトリックの総本山・バチカンのサン・ピエトロ寺院脇の植物園で1月22日蜂須賀桜5本とソメイヨシノ15本を植樹した。

東かがわ市に開かれた神学校の用地が戦国時代三好長慶の家臣の城跡であったことがきっかけで、長慶がキリスト教に寛容であったこと、藩祖・蜂須賀家政が洗礼を受けたと考えられることもあざかって、バチカン側と折衝し実現した。

泉代表のことば「蜂須賀さんはヤマザクラ系統なので何世紀にもわたって花をつける。長慶以来の友好関係をさらにはぐくんでいく象徴として大きく美しく育ってほしい」

(徳島新聞より編集子抄録)



植樹式で蜂須賀桜を植える泉康弘・長慶会代表
写真は坂東利彦氏提供による

梅谷 繁樹氏(国文・11回生)NHK講師に

NHKラジオ講座、宗教の時間(2004年4月～2005年3月)に梅谷繁樹氏(京都・時宗西蓮寺住職)が「一遍の語録をよむ」を講話している。

梅谷のことば「現在は飽食の時代といわれ、生活習慣病やその予備軍の多いことが言われています。体の有り様は心の有り様とも関わりがありましょう。一切を捨てるというのは、単純な他力・易行ではありません。それを身分ある人ではなく、普通の人に対するものです。なぜそうなのかということを、一遍さんの法語を読みながら考えていただきたいと思います」

(テキストはしがきより編集子抄録)

文学部同窓会定期総会

日 時：平成16年11月20日(土) 10:30～14:30

場 所：文学部視聴覚教室(議事)

(阪急六甲より徒歩10～15分)

構内ランス・ボックス2階(懇親会)

議 事：10:30～11:30

議題 1. 学友会会則改正に対する文窓会の基本方針とそれに付随する問題及び役員人事(含事業報告)

2. 東海支部(仮称)結成に向けて(会則第3条に関連)

3. 報告事項その他

講 演：11:30～12:30

講師 社会学 8回生 西村 修氏

演題 「人生と勝負」

(団碁アマ、名人位優勝など多数のタイトル獲得経験。中国など国際交流も多く国内外で活躍。西村宇宙流はプロをも凌ぐ技と独自の境地をゆく(団碁)哲学でも有名)

懇親会：12:30～14:30

会 費：5,000円(当日いただきます)

編集後記

救援投手・コ軍奮投・粉碎降板・始末全記

8月3日の役員会、「文窓」の編集状況はまだ執筆依頼をしていないと聞く。予定ではもう執筆者から原稿を取り、その整理に入っているはずだ。セットにして送付する「文学部だより」は印刷に入稿しているとも聞く。やむを得ない事情も斟酌し詮索無用、しかし当面は轍駁の急。そして思いもしなかった、二軍から上ったばかりの軟弱投手の速成編集長がマウンドへ。編集方針も企画もあったものではない。それらは投げながら考えることにした。カモクでキの弱い編集長もこのときばかりは匹夫の勇で半ば強制、半ば哀願の執筆依頼。条件は期限と字数のみ。イラストは特定のもの以外は竹島百世さん(国文・10回生)にお願いできた。対戦の各打者(執筆者)は名だたる強打者ぞろいで全員快打。企画力も編集技術もない軟弱投手は内心対戦各打者を賛嘆しながらあえなく降板。

最後に執筆・作画・写真などの作成・提供をはじめ仲介の労をとってくださった多くの同窓生および関係者にお礼を申し上げます。ひるがえって速成編集長、余事私事のほどは平身低頭・妄言多謝(H)

題字：文学部教授 福長 進先生にご依頼しました。